

アルトテークとは何か：仏独に見る美術作品貸出ギャラリーとその我が国への移植の可能性

波多野 宏之

【要旨】 アルトテークとは、版画・写真等美術作品を貸出すギャラリーである。ドイツではグラフォテークと称される。本稿では、筆者が訪ねたフランスとドイツにおける事例をとおして、その概要と進展の状況について述べる。さらに、このサービスが我が国においては定着していない現状に触れ、これを阻害している要因について指摘する。

【キーワード】 アルトテーク グラフォテーク 美術作品貸出ギャラリー 美術作品 版画 写真 貸出
フランス ドイツ 日本

1. アルトテークとは何か

アルトテーク (artothèque) とは、版画、写真等美術作品を貸出すギャラリーの呼称である。20世紀初頭より、米欧で始まり、フランスでは、グルノーブル、アヌシーほか、アルザス地方のストラスブル、ミュルーズなどにある。ドイツでは、グラフォテーク (Graphothek) という。

このサービスの目的は、特に地域の若手作家の作品買い上げによる創作支援とオリジナル作品を身近において親しんでもらうことである。施設は公共図書館に設置されることが多いが、美術館、文化センター等に置かれることもある。

筆者がこうしたサービスを耳にしたのは、1985年、国際図書館連盟 (IFLA) の美術図書館分科会が主催したジュネーブでの第1回ヨーロッパ集会においてであった。当時、筆者は滞仏中であり、下記のアルトテーク①②を訪問することができた。また、1996年には、③④を訪問した。

欧米におけるアルトテーク設立の経緯と①②については、「美術作品の貸出とアルトテック」として拙著『画像ドキュメンテーションの世界』で紹介している¹⁾。本稿では①～④について現在の状況

をサイトの情報で補足して略記する²⁾。

2. 1980、1990年代に訪問したアルトテーク

①公立ミラマス・メディアテーク

南仏マルセイユの近郊にあり、1985年当時は、ミラマス公立図書館と称していた³⁾。1983年設立で、現在の所蔵点数は1,900点 (版画、写真のほか油絵、彫刻等、またデジタルプリントを含む)。貸出条件は、個人：5点3か月無料 (登録料も無料)、圏外個人登録料：9€ = 約1,260円⁴⁾。

②ミュルーズ市立美術館アルトテーク

1985年にミュルーズを訪問した際には、ミュルーズ市立図書館内に置かれていた。当時のデータでは、設立後1年で所蔵点数300点 (主として版画)。貸出条件は、個人：3点1か月、1点につき10フラン (約250円 - 当時⁵⁾)。団体：20点1か月、150フラン (3,750円) であった⁶⁾。

③グルノーブル市立カテブ・ヤシン図書館

1996年に訪問したのは、グルノーブル市立グラン＝プラス図書館。現在の所蔵点数は、版画1,000

点以上、写真 650 点。貸出条件は、個人：3 点 3 か月、団体 15 点 3 か月。登録料：大人：16€ (= 約 2,240 円)、18 才未満・65 才以上無料である。

④ アヌシー市立アルトテーク / 図書館・ボンリュウ

1996 年に訪問した際の名称は、同市立図書館。貸出条件は、個人：3 点、団体：25 点、8 週間。登録料：25€ (= 約 3,500 円) である。

3. ストラスブールとシュトゥットガルト：2013 年に訪問したアルトテークとグラフィコテーク

2013 年、在外研究に際してストラスブールとシュトゥットガルトを訪問する機会を得た。前者はフランス第 3 の大都市であり、図書館組織がやや複雑になっているので、まずこれについて略述する。

ストラスブール都市共同体 (Communauté urbaine de Strasbourg CUS) の発足は、1966 年。ストラスブールとその周辺の 28 自治体からなり、人口は約 48 万人。これはバ＝ラン県の 45%、アルザス地方全体の 25% を占める。うち、60% はストラスブール在住である。面積は約 306km² [東京都区部の約半分]。

CUS のメディアテーク網としては 3 館あり、

その中央館がメディアテーク・アンドレ・マルローである。他に市独自の図書館網としては、市立メディアテーク 10 館と移動図書館がある。その他の自治体には合計 16 のメディアテークがある。

これらの図書館に共通の利用条件は、登録料(個人)：図書雑誌 (に限定したサービス)：8.4 € (= 約 1,180 円)、図書雑誌 + 視聴覚資料 + 版画等：26 € (= 約 3,640 円)、16 歳未満：すべて無料という具合に細分されており、利用者に適したサービスが選択できる。

上記の中で、アルトテークのサービスを行っているのが下記である。

メディアテーク・ノイドルフ

(Médiathèque de Neudorf)

アルトテークは、ストラスブール市立メディアテーク網の一つであるこの館 (図 1-1) のみに置かれている。所蔵点数は約 800 点。ここでの貸出条件は、上記の規則に則り、個人：無料 (メディアテーク要登録：一般 26€ = 約 3,640 円) 1 点 1 か月で更新可 (= 年 12 点)。公共団体 (学校、病院等)：無料：5 点 2 か月。会社等：無料 (メディアテーク要登録：100€ (= 約 14,000 円) の場合、同時に 3 点 3 か月ごとに更新可 (= 年 12 点)。200€ (= 約 28,000 円) の場合、同時に 6 点 3 か月ごとに更新可 (= 年 24 点)。800€ (= 約 112,000 円) の場



図 1-1 アルトテーク・ノイドルフ



図 1-2 同 版画の棚



図 1-3 同 ギャラリー

合、同時に 10 点 3 か月ごとに更新可(=年 40 点)でこの場合、職員による作品解説サービスが付く。図 1-2 のような棚に作品が置かれ、利用者は自由に取出して見ることができる。また、広いギャラリー(図 1-3)を備え、作品を持ち帰る際に入れる各種サイズのバッグ(図 1-4)も用意されている。

シュトゥットガルト市立図書館グラフォテーク(Stadtsbibliothek Stuttgart am Mailander Platz)

1997、旧貨物駅跡地に新館が計画され、1999 年、コンペにて韓国の建築家イ・ウンヨン(Eun Yong Yi)が選ばれた。同館は、2011 年に開館し、図 2-1 に見るように壮大な内観をしている。そしてこの最上階にドイツ語で言うところのグラフォテ



図 2-1 シュトゥットガルト市立図書館内部



図 1-4 同 貸出カウンターと貸出用バッグ

ーク(Graphothek)がある。

グラフォテーク(Graphothek)

1976 年以來の所蔵品(図 2-2 ~ 2-4)は、2,500 点以上(版画・素描・写真・コラージュ・水彩画等)で、貸出条件は、8 週間で 2.5€(=約 350 円)である。

このグラフォテークは、ベルリン、ケルン等に加え、ドイツで 5 指に入ると言われ、個人図書カードと作品に貼付したバーコードによる自動貸出システムもあり、作品を借り出すことが特別なことではないことを窺わせている。

4. 30 年間の変化

1980 年代から最近まで 30 年間、実際に訪問したのは、都合 6 館にすぎないが、大まかな変化



図 2-2 同 グラフォテーク



図 2-3 同 版画の棚

と次のような点が指摘できよう。

・アルトテック設置母体の変化

図書館の移設や名称変更が見られる。

・アルトテック施設及び所蔵点数の変化

作品数の増加はもとより、1980年代、ミラマスでは、エントランスのスペースを利用していたが、後に独自のギャラリーを持つようになるなど展示スペースの改善・拡大が行われている。

・貸出料金の変化

ミラマスでは、1985年当時、登録料250フランが必要であったが、現在では無料となっている例や、ストラスプールのように登録料を部分的に無料化する例も出てきている。

5. 我が国におけるアルトテックの可能性

悉皆調査をしていないので詳細は不明であるが、我が国の公共図書館や公民館における絵画貸出しサービスとしては、栃木県宇都宮市立河内図書館、栃木県上三川町立図書館、埼玉県入間市図書館、大阪府茨木市図書館、愛知県飛鳥村図書館（公民館で事業開始）などが知られている。また、茨城県立近代美術館や埼玉県立近代美術館による小・中・高校等への貸出サービスも知られているが、これらはいずれも、西洋名画等のいわゆる複製絵画であり、オリジナル作品である版画や写真等ではない。



図 2-4 同 壁面

これに対して、期間限定の美術作品貸出プロジェクトが2003-4年にかけて仙台メディアテークと東北芸術工科大学の協力で行われた。仙台メディアテーク（図書館、ギャラリー、映像スタジオ等からなる複合文化施設）におけるイベント期間限定で学生等の作品を貸し出した。

また、現在進行中のプロジェクトとして京都造形芸術大学アルトテック：リースプログラム / Artoteque - Student Art Rental Program があり、椿昇教授と小野規教授の共同ディレクションによる、2015年開催の京都国際現代芸術祭「PARASOPHIA」との連携プログラムとして計画されている⁷⁾。

概要は、以下のとおり。

- ・作品：日本画、油画、版画、写真、映像、ドローイングなどの平面作品
- ・制作：学生（3回生以上）、院生、留学生、卒業生、教職員
- ・募集するクライアント
京都市近郊を中心とした個人、銀行、宿泊施設、病院、飲食店など
- ・作家へのリース料支払い
一律、一作品につき3,000円
- ・作品搬入・設置・返却は学生インターンを中心にARTOTHEQUE staffが行う。
仏独におけるサービスとの比較のため、貸出条件も掲げておく。

個人(1年間)

- 1 作品 × 4 シーズン(4 作品) = ¥30,000
- 2 作品 × 4 シーズン(8 作品) = ¥58,000
- 3 作品 × 4 シーズン(12 作品) = ¥84,000

法人(1年間)

- 1 作品 × 4 シーズン(4 作品) = ¥30,000
- 3 作品 × 4 シーズン(12 作品) = ¥84,000
- 5 作品 × 4 シーズン(20 作品) = ¥135,000

仏独の例と比べると割高であるが、前者は公的サービスであり、後者は私学による私的な活動であって、同列に論じることはできない。いずれにしても、新たな試みとして注目に値する。

ところで、このような新しい試みはあるものの、なぜアルトテークの活動が我が国に正しく移植されないのか。ここでは、とりあえず、いくつかの要因を列挙して、可能性を考えるための一歩としたい。

- ・ サービス自体が広く知られていない。
公共図書館等のサービスの一部と認識されていない。
- ・ 美術作品を購入して額装し、個人的に鑑賞する習慣自体が形成されていない。(美術作品は美術館等で鑑賞するもの、という<常識>の存在。)
- ・ 美術作品を所有する〔コレクションする〕趣味・階層の未成熟。
- ・ 壁に美術作品を掛ける伝統の未形成。(美術作品は収納しておき、ハレの時だけ出す習慣)の名残。
- ・ 美術品の材質の相違(日本画等の脆弱性に起因する)。
- ・ 住宅事情：壁が少ない、床の間の消失、賃貸家屋の壁の利用の制限。
- ・ 美術鑑賞教育の違い(児童生徒の美術作品鑑賞機会が少ない)。
- ・ 文化行政の違い(創作支援等への行政的対応が脆弱である)。

多くの検討課題があるが、ここでは、たとえば、日本家屋における作品展示空間としての「床の間」

の伝統や屋内における「作品」の存立形式としての「襖」や「屏風」の存在、その反面、壁面が極端に少ないといった点を特に挙げておきたい⁸⁾。

もし、アルトテークのサービスが身近にあれば利用するかとの問いに、美術品を身近に置くとなれば、「自分のもの」ならばよいが借り物を置くのは気が進まない、という反応を受けることが多い。図書の借用(図書館からの借用の慣習化)と対比して考察することも今後の課題であろう。

注

- 1) 波多野宏之. 画像ドキュメンテーションの世界. 勁草書房, 1993, 189p. 美術作品の貸出とアルトテーク: p.25-34.
- 2) Médiathèque/artothèque [Miramas] <http://www.miramas.org/mes-loisirs/culture/médiathèque-artothèque/> (参照 2014-11-18)
Arthothèque de Mulhouse <http://www.cnap.fr/arthotheque-de-mulhuse/> (参照 2014-10-16)
Bibliothèque d'agglomération Bonlieu (Annecy) http://bibliotheques.agglo-annecy.fr/index.php?option=com_content&view=article&id=635:lartothèque-de-la-bibliothèque-bonlieu&catid=14&Itemid=32 (参照 2014-10-16)
Bibliothèques municipales de Grenoble artothèque municipale <http://bm-grenoble.fr/605-1-artotheque.htm/> (参照 2014-11-18)
- 3) 1980年代以降、フランスでは「図書館 bibliothèque」に替えて「メディアテーク médiathèque」の語が使われるケースが多い。「様々なメディアを置く館」の意である。
- 4) 1€ = 140円として計算。以下同様。
- 5) 1フラン = 25円(当時)として計算。以下同様。
- 6) 前掲 1) p.28.
- 7) アルトテック: リースプログラム <http://www.3-gai.com/?p=520> (参照 2014-11-18)
- 8) 太田博太郎. 床の間: 日本住宅の象徴. 岩波書店, 1978, 201p. (岩波新書)

What is an “Artotheque”?: The artwork lending galleries in France and Germany and their transplantability in Japan

By Hiroyuki Hatano

[Abstract] An artotheque is a gallery which is intended to lend artworks such as block prints and photographs. In Germany it is called “Graphothek”. This essay describes the outline and progress of the artotheque or Graphothek, considering the cases of the galleries of both countries the author visited last time. Furthermore, this description goes to a fact that few of this kind of the galleries have been planted in Japan, as well as probable factors to impede such implanting.

[Key words] artotheque, Graphothek, artwork lending gallery, artwork, block print, photograph, lending, France, Germany, Japan